

共に生きる地球を目指して ～アフリカで国際協力を進めるKさんに出会って～

石川 和之

横浜市立宮谷小学校

◆実践教科：社会科

◆時間数：11 時間

◆対象学年：小学 6 年生

◆対象人数：136 名

カリキュラム

<実践の目的>

アフリカのウガンダやザンビアにて国際協力活動を進めるKさんの生き方を見つめることを通して、ウガンダやザンビアの子どもたちの様子や国際協力活動について理解を深め、国際社会の中で自分には何ができるか、自分はどう生きていくべきかを考え、同じ地球に生きる者として、協力を必要としている人に対して、積極的にかかわっていかうとする考え方や態度の基盤をつくっていく。

●学習目標

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	観察・資料活用の技能・表現	社会的事象についての知識・理解
①世界が抱える問題に関心を持ち、それを解決するための、ユニセフをはじめとした国際連合の働きについて、問題意識をもって進んで調べることができる。 ②青年海外協力隊などの日本の国際協力活動に関心を持ち、意欲的に調べ、考えながら追究することができる。	③ユニセフをはじめとした国際連合の働きや日本の国際協力について調べ、世界平和の大切さを考えることができる。 ④青年海外協力隊の活動など、日本の国際協力の様子を調べ、こうした日本人の活動が、相手国のみならず世界の平和や発展のために、重要な役割を果たしていることを考えることができる。	⑤ユニセフの仕組みや活動の様子、その他の国際連合の働きについて調べることができる。 ⑥青年海外協力隊や NGO の活動など日本の国際協力の様子を、各種資料やインタビューなどから調べ、分かりやすくまとめることができる。	⑦ユニセフの活動を調べることで、平和な国際社会の実現に努力する国際連合の働きが分かる。 ⑧青年海外協力隊や NGO の活動などを通して、日本の国際協力活動の様子が分かる。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1・2	世界の国々の生活を知ろう。(アフリカ・ウガンダの人々の生活) <目標：①>	<ul style="list-style-type: none"> 写真や資料からウガンダの人々の暮らしを知る。 ウガンダの人々の暮らしと自分たちの生活を比較する。 感想を述べ合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ウガンダの写真 地球儀
3	世界の取り組みを調べてみよう。(国連の取り組み) <目標：⑤、⑦>	<ul style="list-style-type: none"> ユニセフの活動について調べる。 自分たちの募金がどのように開発途上国へ送られるか調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ユニセフのポスター 教科書 資料集
	<目標：③、⑦>	<ul style="list-style-type: none"> ユネスコの活動について調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書

			<ul style="list-style-type: none"> 資料集
4	日本の取り組みを調べてみよう。 <目標：③、②>	<ul style="list-style-type: none"> ウガンダでの青年海外協力隊員の活動を紹介し、青年海外協力隊の働きについて理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ウガンダで出会った協力隊の方の写真 ウガンダの子どもから頂いた手紙
5	<目標：②>	<ul style="list-style-type: none"> ザンビア共和国で活動してきた協力隊OBのKさんに対する質問を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ウガンダの協力隊の方が書いたお便り
6	<目標：⑥、⑧>	<ul style="list-style-type: none"> Kさんのエイズ孤児院での活動体験談を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> Kさんのプレゼンテーションソフト Kさんの人生年表
7・8・9・10	<目標：④>	<ul style="list-style-type: none"> Kさんの話から気づいたことや疑問に思ったことをまとめ、それについて話し合う。 自分の意見を裏付ける資料を探す。 	<ul style="list-style-type: none"> ザンビアの孤児の人数変化のグラフ インターネット
11	世界の中の日本、そして日本人としての自分について、まとめよう。 <目標：④>	<ul style="list-style-type: none"> 地球市民として自分にできることを考え、話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 先進国のHIV感染率のグラフ

授業の詳細

<前の単元>

- 江戸時代後期にロシアやイギリス、アメリカなどの船が日本に近づいてきた。

混乱する日本国内

ペリーの来航でさらに混乱する。

開国！！

- 鎖国の時代から、世界の中の日本へ。
→世界の国々は技術が発達しており、様々なものが日本に伝えられた。
武力や技術の遅れから、不平等な条約も結ばざるをえなかった。
- 世界の中の一国となったこれからの日本を、どう作っていかうとしたんだろう。

今後の歴史学習は、「世界の中の日本」という視点がとても大事になってくる。
そこで、今現在の世界の様子を知り、今現在の日本の取り組みを先に勉強してみよう！



<単元導入への布石> (10月10日)「JICA 横浜訪問学習」

- 横浜に来た海外の研修員の方と出会い、直接触れ合う。

ガーナ、インドネシア、イラク、ジャマイカ、パキスタン、南アフリカ共和国、スーダン、ウガンダの方々と。

- 簡単な海外の遊びをしたり、民族衣装を一緒に着たり、楽器を触ったりした。
- 日本の踊りを披露しようと、全員でソーラン節を踊り、海外の方にも教えた。

共に生きる地球を目指して～アフリカで国際協力活動を進めるKさんに会って～

〈1 時限から 5 時限のねらい〉 調べ学習等を通して、開発途上国の子どもたちに対して思いをいだき、援助や協力の必要性を感じるとともに、国際連合の機関や日本の政府が行っている公的な援助や協力、そしてNGOや海外協力隊のような一般の人ができる援助や協力の仕方があることに関心をもつ。

世界の国々の生活を知ろう。(アフリカ・ウガンダの人々の生活) [1] [2]

- ウガンダの生活の様子を見て、思ったことを話し合おう。
- ・ 自分たちの生活とすごく違うよ。どうしてこんなに違うんだろう。
 - ・ こんなに違う生活をしている国が同じ地球の中にある状況、どうにかならないのだろうか。
 - ・ 自分たちにできることはないのかな。
 - ・ 他の国々は、何をしているのかな。日本は何をしているのかな。
- (※ 資料：写真、地球儀 ☆目標：① ③)



日本や世界の国々は、開発途上国の生活を改善するために、どんな取り組みをしているのか、調べてみよう！

生徒の感想

- 自給自足の生活はそれはそれでいいと思う。
- 貧しいというよりは、そんなのはあまり感じていないと思う
- 日本みたいにとっても発達してる国と、ウガンダのように発達していない国があるのはよくないから、発達している国が協力してお金を集めればすごい大金になって井戸をいっぱい作れると思う。
- 生きていくにはとても大変な状況だけど、生き続けている。自分だったら無理だと思う。
- ウガンダは技術が発達していない。駅などで自分が募金したお金は本当に必要な農民には届かず他の人にまわってしまわないか心配。ちゃんと届けたい。どんどんいろいろな技術を教えてあげてほしい。
- 自然のある国は不便そうだけど、それだからこそ人々のきずなが大きいのではないかと思う。

世界の取り組みを調べてみよう。(国連の取り組み)〔3〕

○ 自分たちが毎年募金しているユニセフの活動を調べよう。

・世界の平和を守るためにつくられた国連の機関だよ。

・はしかなどの予防接種をしている。
・身長体重を測って栄養状態を確認しているよ。
・保健センターをつくって薬をあげているよ。

・井戸をつくっているよ。
・井戸に汚れた水が入らないようにトイレをつくっているよ。

・学校をつくっているよ。
・先生を育てているよ。
・教材を届けているよ。

・日本で私たちが募金したら、日本ユニセフ協会にいて、それから国連やユニセフの本部があるニューヨークに集められるよ。それから開発途上国の現地へ送られるんだって。

(※資料：ユニセフのポスター ☆目標：⑤ ⑦)

○ もう一つ、国連の機関でユネスコの活動があるよ

・世界の読み書きができない人をなくすための識字活動をしているよ。

・世界的な文化遺産や自然遺産を守る活動もしているよ。

(☆目標：③ ⑦)

生徒の感想

- できた物をわたすのではなく、できる前の物を渡すといいと思う。(つくり方を教える)
- ウガンダと日本では、あまりに違いがありすぎる。技術が発達しているなら、日本の技術をあげた方がいいと思う。
- 衣食住が安心してできるように日本が手伝っていることをもっと多く手伝うといい。日本は人はあまり送っていないけれど、お金はたくさんあげている(日本が第1位)だから、「日本はお金は出すけれども汗はかかない」と言われている。
- 援助しすぎないで自分たちで出来るようにするための機械や技術を教えてあげればいいと思った。
- 援助をするのはいいけれど、もし援助をしたご飯がなくなったら今までと違う生活になるので、その作り方や育て方を教えてあげればウガンダが良い国になると思う。
- 私は身近なことで募金したい。学校でやるユニセフ募金やボルビックの水を買うようにする。



日本の取り組みを調べてみよう。〔4〕〔5〕

○ 日本は開発途上国の生活をよくするために、どんなことをしているのだろう。

〔4〕〔5〕 ウガンダでの青年海外協力隊の活動紹介

- ・ なんか外国でしているんだろね。
- ・ 日本の生活と全然違う国に住むんだからすごく大変じゃないのかな。
- ・ 世界の平和や開発途上国の生活が少しでも良くなるように考えてがんばっているなんてすごいね。
- ・ なんか人が行っているんだろね。会ってみたいな。

(※資料：ウガンダ産の紅茶、協力隊員の生活の写真、手紙、協力隊員が配属されている学校から宮谷小学校へのお便り、地球儀 ☆目標：②)



生徒の感想

- (青年海外協力隊員が) 仕事を辞めてまでなぜやりたいのか知りたいです。
- 読み書きが出来ない人が多いのはびっくりした。テレビとかもないのにどうやって生きているんだ!!
- ユニセフのような機関の活動があるからこそ世界中の人たちが自由に生きることができるので、これからは学校での募金をきちんとしたい。日本はウガンダに比べて本当に豊かなのだなと思った。紅茶も香りが良くておいしかった。
- 貧しい国のことなんて自分に関係ないと思っている人が日本にはたくさんいるが、いつ日本が貧しくなるかわからない。そんなとき引張ってってくれるのが NGO の方々。その役目にたってくれと思うとすごいなと思う。
- 青年海外協力隊の人は、どうしても助けたいという思いが強いなと思った。
- 国際連合の機関はいろいろあってユニセフもその一部であることが分かった。日本で働いていたのに青年海外協力隊に入りたいからといって仕事を辞めるなんてすごい。それほど貧困に苦しい国を助けたいという思いがあるんだなと思った。

〈6 時限から 10 時限のねらい〉 国際協力活動に取り組んできた K さんと出会い、K さんの思いにふれることを通して、公的な援助や協力のほかにも、一般の人ができる援助や協力の道がたくさんあることを知り、これからの自分自身の国際協力のあり方を考え直そうとする。

K さんに焦点をあて、国際協力活動について学ぶ〔6〕〔7〕〔8〕〔9〕〔10〕

〔6〕ザンビア共和国で青年海外協力隊員として活動してきた K さん

- ・ カシシ子どもの家というエイズ孤児のための孤児院で 2 年間活動してきた K さんの話を聞く。(※資料：ザンビアでの活動風景の写真、K さんの人生年表 ☆目標：②)

K さんに質問してみたいこと

- ・ 現地の人はこちらからの援助をどう思っているのか。
- ・ 向こうの人は日本人をどう思っているのか
- ・ ザンビアではいつも何を食べていたか。
- ・ 大変だったことは何か。ザンビアではどんな活動をしていたのか。
- ・ どうして青年海外協力隊に入ったのか。今、途上国のために私たちにできることは？
- ・ 向こうで一番不便だと思ったことは？日本になくて向こうにあることは？
- ・ ザンビアの人の第一印象は？ザンビアのいいところは？



授業風景 (HIV の感染速度を体感するワークショップや K さんのザンビアでの活動紹介)

K さんのザンビアでの活動写真



カシシ子どもの家では父親代わりだった K さん
学校での三者面談の様子



針金からラジコンを作り出す子どもたち！

生徒の感想

- 子供たちが針金でラジコンをつくっていてすごかった。歯磨きはやっているのかな。
- ザンビアにはHIVにかかっている子供が多いと聞いたが、みんなすごく元気そうでした。おもちゃを手作りしていることに驚いた。なぜザンビアの子供たちは親がいなかったりHIVに感染したりするのになぜあんなに元気なのだろう。
- (クラスに)34人も居て一人がHIVにかかっている1分間での広がり方にどこかすさまじい力を感じた。もっと一人ひとりが意識して正しい知識を身につけるべきだと改めて思い、赤ちゃんがHIVに感染している恐れが高いと聞くところから心苦しく、自分がHIVに感染していることを知っているのにのびのび生きられる理由、それはきっと体験しないと分からない。楽しい体験ができたが、少し悲しくもあった。この事実を軽い気持ちで受け止めてはいけない
- お金がなくても幸せになれる根性がすごいと思った。ボールをついたり、ラジコンをついたりして、楽しくなるように工夫しているのがすごいと思う。
- 河野さんの話を聞いてほとんどの子供がHIVに感染していることが分かった急に怖くなった。1分間のゲームでよく分かった。寿命が38歳でお母さんが死んでしまってもたお母さんが変わるのびびっくりした。明日死ぬかもしれないのに楽しそうに遊んでいたのが、僕たちより全然すごいと思う。
- こんなに生活が違うんだと今日のこの1時間ですごく思った。どうして世界はこんなに生活が間逆の人たちがいるのだろうとすごく疑問に思った。

〔7〕〔8〕Kさんのお話の感想(分かったこと・考えたこと)や、疑問を出し合おう。

- ・ 何よりもザンビアの平均寿命が38歳だということに驚いたよ。
 - ・ 両親も早く亡くなるから、孤児の数がすごく多くて、Kさんも孤児院で働いていたよ。
 - ・ HIVに感染している人がすごく多かったよ。
 - ・ ノートや鉛筆は結構そろっていたけど、算数が苦手な子どもが多かった。
 - ・ 大人が少ないから、先生もすごく少なくて、九九すらできない先生もいるんだって。
 - ・ ぼくたちはどうしたらいいんだろう。Kさんはこの状況に納得して帰ってきたのかな。
- (※資料:「カシシ子どもの家」で暮らす子どもたちの写真、カシシ子どもの家のホームページ、Kさんの人生年表 ☆目標:④ ⑥ ⑧)

Kさんのザンビアでの活動写真



授業に集中できない様子



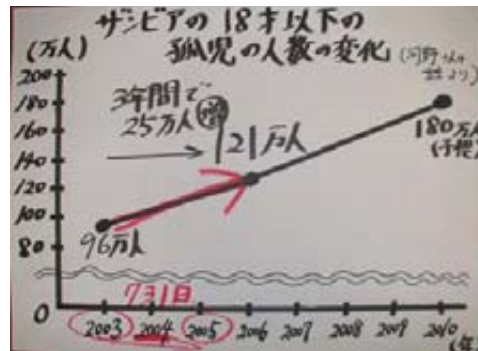
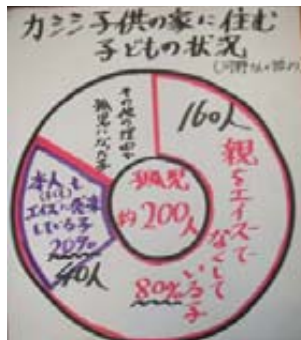
棒を書いて、計算中

生徒の感想

- 勉強は大切なのに、かけ算もできない先生がたくさんいて、この状態だと何にもならないので、先生を教える人が大切だと思った
- みんなで一回、行ってみたいと思った。
- 教育も医学の次に大切な1つだと思うので、もっと改善していった方がいいと思った。
- HIVに感染している子供がなぜ笑顔であるのか、その原動力を知りたいです。
- もっと日本や他の国の人などが行って勉強などを教えれば良いと思った。でも私が行けといわれても行かないと思う。理由は病気がうつるかも知れないし死ぬかもしれないから
- 昨日、カシシ子供の家のホームページを見てみたらシスターの方からの手紙が書いてあったりエイズ・HIVだけどここの子供は元気！？って書いてあった。外国のHPにもいったら死んじゃった子達の顔と歳と好きなことが書いてあった。

〔9〕〔10〕 Kさんはザンビアでやるべきことを本当に達成して帰ってきたのか、ということにテーマを絞り、意見を出し合う。

(※資料：ザンビアにおける孤児の数の変化のグラフ、カシシ子ども家のエイズの人数のグラフ、カシシ子ども家のホームページ ☆目標：④ ⑥)



テーマ：「ザンビアにKさんが行っていた2年間は、長く感じるか、短く感じるか。」

生徒の意見

- もらえるお金は少ないし、死ぬかもしれない不安！
- 地球をもっと住みやすいところにするには、協力のために外国に行ってもいいかな…と思った。
- 開発途上国を技術が発達した国にするのは難しい。でも、私は、このザンビアに行って、数学などをザンビアの子供たちに教えてあげたいです。
- ザンビアの子供たちの母親代わりに人が変わったら、その子供たちは、一緒につくった思い出だから、いなくなるとさびしいと思う。2年間はやっぱり短いと思う。
- 行きたくない…。おいしい食べ物やきれいな服が着れないなどやっぱり自分が中心で欲が出ちゃうと思う。豊かな日本で産まれて生活するとあまり行きたくなくなる。
- 私はKさんや石川先生がすごいと思う。熱い気持ちがあれば青年海外協力隊に入れると思う。少くなら(1週間くらいなら)ザンビアとかに行ってもいいけど、病気になったら嫌だから迷ってしまう。

どうしよう!?

テーマ：「Kさんにとってザンビアでの2年間は長かったのだろうか。短かったのだろうか。」

生徒の意見

【短い、長い 両方】

- 期間の2年は数字的には長いと思うけど、気持ち的には短いと思う。いろんな現状を見ると余計にもっといたくなるんだと思う。またザンビアの子供たちにとってはお父さん役の人が2年間というのは数字的にも気持ち的にも短いと思う。調べてみて、Kさんはいろいろ充実した生活を送っていたようだった。

【短い】

- 水は濁っていたり HIV やエイズで世話をしている子どもが死んでしまうかもしれないけど、Kさんは子供たちと一緒にいるのがすごく楽しそうだったのを見てそう思った。「もう子供たちの墓作りはしたくない」というKさんの言葉からもそう思った。自分で選んだ仕事。子供たちのことを話すKさんは楽しそう、でも少し懐かしがっているようにも見えたから。
- 開発途上国をなおすための2年間は短いと思う。開発途上国はいっぱいあるけど、その中でザンビアをなおすのは2年間じゃ少し短いと思った。
- ザンビアを援助するためには時間が必要だと思ったから。写真を見ても、Kさんはたくさんの子供に好かれていたから、Kさんももっと子供たちと遊びたかったと思う。
- 子供たちから好かれていて、子供が大好きだから。子供のことが心配で、子供たちもKさんが好きだから。

【長い】

- 日本みたいにきれいな服を着ておいしい食べ物を食べるという生活ができるところから、豆など穀物の多いいつも同じおいしくない食べ物を食べるザンビアのところに急に行くのは大変。毎日毎日そうじなど世話は大変。今まで独身だった人が一気に200人近くのお父さんになるのは大変。
- 向こうで楽しかったとしても、いろいろ大変だし、何かの病気にかかったことも聞いているし、墓の穴を掘るのは嫌だと言っていたから。

テーマ：「Kさんは日本に帰るとき、やり残したことはなかったのだろうか。」

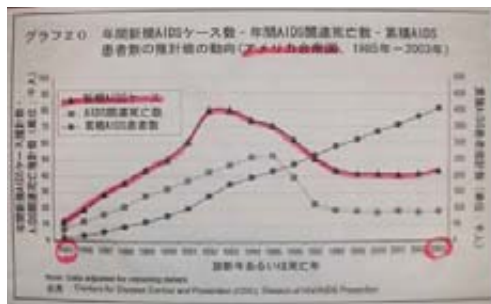
生徒の意見

- 2年間じゃ教えなきゃいけないことが全部教えきれない。無理。遣り残したと思うし、悔いが残る。カシシ子供の家で育ったシスターのジェーンさんはつらい労働がある今の仕事をずっと続けているのはすごいなと思った。
- Kさんはなんかやるせない気持ちになったと思う。ここで育った人がまた後世につなげていくことが大切だと思う。自分が体験したことだから、この子たちがどうしてほしいのか何をすればいいかが一番分かると思う。
- シスターのジェーンさんが、育ってからも働くってことは、とてもすごいと思う。やっぱり一番大事なことは、命を守ることだと思う。
- Kさんはザンビアに2年間行って、ジェーンさんというシスターと孤児院と一緒に働いて、人と人のつながりを大切にして、教育などをしていたと思う。
- Kさんはやはり未練があったのではないかな。そして、やっている物事によって2年が長いかわりかは変わるのではないかと考えた。

〈11 時限のねらい〉 援助や協力ということに関して、自分のテーマを定め、調べたり、表現したりする。

世界の中の日本、そして日本人としての自分について、まとめよう。〔11〕

- 今の私たちには何ができるだろう。
 - ・ 2年間のザンビアでの協力活動を終えた K さんの生き方を追いながら、同じ地球に生きる者として、自分たちに何ができるか考える。
 - ・ HIV について、遠いザンビアの問題と捉えるのではなく、身近な問題として提起する（日本での HIV 新規感染の拡大について話し合う）
- (※資料：先進国の新規HIV感染率の変化のグラフ（アメリカと日本） ☆目標：④)



生徒の感想

- K さんは命の大切さについてあらためてわかったと思う。K さんはとてもすごいんだなあと思った。なぜかという、笑顔をなくさないところがすごいと思った。
- ザンビアの子どもたちは死んでしまうかもしれないけど、がんばって生きている。日本の人も見習ったほうがいい。
- この学習を通して、地球に住んでいる人間は、みな同じではないことが分かった。将来、青年海外協力隊に1週間くらいだったら行けると思う。
- 最初にこの勉強をしてみて世界で困っている子がたくさんいると聞いて自分で出来ることはやろうと思った。この勉強をしていくうちに、ザンビアでは学力が低下している、清潔な水も飲めない、日本では当たり前のことなのに開発途上国ではそれができないと聞いて驚いた。今この時間で子どもたちが死んでいくと思うと日本ではありえないこと。今からみんなでできる募金活動などで世界で困っている人たちをこの勉強を通して助けてあげたいと思った。
- 私はKさんに会って、協力隊としてすごく守ろうとしているんだと思った。協力隊として頑張っても孤児は増えているかもしれないけど、協力隊の方がいなかったらもっと増えていると思う。でも私は協力隊にはなりたくない。理由は、死ぬかもしれないから。
- K さんは自分がいくらがんばっても、孤児はどんどん増える。自分の無力感を強く感じたと思う。世界がHIVに汚染されエイズが広まっている事実。世界を助けるためにもいざ誰かが立ち上がるべきである。自分に関係ない、遠い海の向こうの問題だと思っていたら、大間違い。広がりがつつあるHIVに目を向けるべきであり、手を差し伸べるべきであると思う。

学習後に書いたKさんへの手紙

- ぼくはKさんの授業以来、日頃飲んでいるコーラなどを味わって飲むようにし、必ず残さないようにしている。また、今僕がだら～としている瞬間も世界では苦しんでいる人、苦しんでいる人を助けている人がいるんだと思うようになった。世界にはこんなに貧富の差があることが分かった。
- 私はあの最初のゲームでいかに速くものが伝わるかを知り、とても驚かされた。そんなふうにHIVがはやってほしくないと思った。でも写真で見せていただいたら、みんな前向きに生きているのを知って感心した。でも勉強をもっとがんばってほしい。たし算は食べ物を買ったりするのに必要だし何かを作るのにも少しは必要だと思う。
- ザンビアの子どもたちはすごいんですね。僕たちも尊敬しなければいけませんね。でも僕はザンビアには行けません、怖いからです。でもKさんはそれをやったのだから、僕は本当に見習わないといけません。ぼくは、日本人です。エイズとかもかかりにくいです。でもエイズにかかった人にしか分からないこともいっぱいあると思う。だからそういう気持ちを分かっていたいです。
- Kさんの授業は面白くて、でも現実味をおびていて時々反省させられることもあった。最後に質問。Kさんはこの体験を通して何を子どもたちから受け取りましたか。
- 私は青年海外協力隊の人が来ると聞いて、行きたいか行きたくないかとどちらかで答えるとき、あまり行ってみたいと思わなかった。もし病気になったら…日本に帰れないのでは…きれいな水が飲めないのでは…といういろいろな不安があったから。Kさんの話を聞いて心に残ったことがたくさんある。一つは孤児がとて増えているということ。たくさんの人が支援に行っているのに、なんで増えるの？二つ目はエイズの日本の伸び率がとても高いということ。私は今まで日本にはエイズは全くないと思っていたから。今までエイズにかかっている人と会った事がない。もしかしたら会っているのかもしれないけど、聞いたことがないからとても驚いた。私はまだ自分のことを優先してしまいがち。おいしい食べ物を食べてきれいな水を飲み生活する。日本で生活して急にそのような生活ができなくなるというのは大変ではありませんでしたか。けれど、大変だからこそ、自分が今行っていることに自信が持て、やりがいがあると感じられるのだと思う。Kさんが教えてくれたことを思い出して生活していきます。
- 今回この勉強をしてHIVに感染している子どもたちが増えているということを初めて知った。Kさんは子どもがとて好きだということが伝わってきた。写真を見たとき、子どもたちはエイズだと知っていても明るく生きているところがとてもすごいことだと思った。
- 僕も将来、青年海外協力隊になってたくさんの人々が一生に少しだけでも「とても楽しい」と思う生活ができるようにしたいと思った。そのために今から体を丈夫にし、たくさん勉強をし、将来ちゃんとした大人になってがんばりたいと思う。
- Kさんは2年間ではなくできるなら一生いたかったと思う。だけどKさんは自分ができることはやったのではないですか？Kさんがザンビアから帰ってきたときは達成感にあふれていたと思う。Kさんがザンビアに行ったことで助けてもらった人はたくさんいたと思う。
- ぼくは青年海外協力隊になりたいという夢はないが、トヨタの会社に勤めたいという夢がある。その夢を叶えるためにも6年生で勉強した世界の人々が苦しんでいるということから世界の国々に会社で造った車をプレゼントしたいと考えている。

成果と課題

ウガンダから持ち帰った写真資料は、子どもにとってより身近に感じる事ができたようである。私と一緒に写った写真は、私の服装や履き物とも比較でき、子どもにとって、自分の生活との違いを見つけやすかったようである。また、ウガンダのバックレー小学校の子どもたちが書いた手紙についても、実際に現地の子供たちが書いた文章に触れ、身近に感じる事ができた。

第4時と第5時に用いた、ウガンダでの青年海外協力隊の話や写真資料は、なかなかうまく提示できなかったと感じる。ザンビアに青年海外協力隊に行かれたKさんとの出会いをどういったものにするか悩んでいたからだと思う。結局、ウガンダの話がザンビアの話にうまく切り替えられず、子どもの思考の流れを止めてしまったように感じる。また、Kさんに会って聞きたいことをそれぞれの子どもがまとめたノートを見ても、単元導入の開発途上国の生活について強いインパクトがあったのか、なかなか青年海外協力隊の日頃の活動について焦点を絞れきれなかった。

青年海外協力隊のKさんとの出会い後の学習問題は、「Kさんがザンビアで過ごした2年間は、長かったのかな？短かったのかな？」であった。当初の計画では、「Kさんはザンビアでやるべきことを本当に達成して帰ってきたのかな」であった。Kさんの話の事実を振り返る中で、Kさんの人生年表を見て、ザンビアに行った『2年間』という期間について子どもが強く関心を示した。子どもにとって、大変な生活の中での2年間というのは切実に感じたようであった。

毎回、子どものノートを集めて、一人ひとりの考えの変容を見ていく中で、それぞれの考えがしっかりとしてくるのが分かった。単元の導入で、自分たちの生活と違っていることについて深く考えた子どもは、自分自身が2年間同じような生活をするとうなるだろうとさらに考え、2年間は長く感じたのではないかという自分の考えをもっていた。一方、青年海外協力隊のKさんの話やプロジェクトに映し出されたKさんの生活の様子の写真に強く印象づけられた子どもは、Kさんの協力隊に対する強い思いを感じ、2年間はやっぱり最終的には短かったのではないかと考えた。

本時の学習問題に対する子どもたちの考えがそれぞれ長かろうと短かろうと、大切なところは、Kさんの活動した2年間に深くスポットをあてて考えられるかどうかにある。どちらの答えにしても本当のところは、Kさんに聞いてみないとわからない。以上の思考の流れから最終的に考えた内容は、「日本に帰るときにやり残したことはなかったのだろうか」であった。子どもの中から出てきた疑問である。単元構成を最初に考えていたときにあった「本当に達成して帰ってきたのかな」に迫れるものだと考えた。しかし、本時の授業記録を見て分かるように、なかなか子どもたちからザンビア人のジェーンさんの話が出てこず、教師の方で強引に話をしてしまった。もう少し待ってみたかった。「ここで育ったシスターがまたこうやって働いている」という事実、「つながっている」という言葉が子どもから出てきた。この「つながり」をどこまで子どもが考えられたか、難しいところであるが、感想からは何人かが気付きかけているように思う。

本単元は、本来は卒業の直前に行う学習である。卒業を前に、自分のこれからの生き方を考えるにあたって、大きく影響する単元であると言ってもいいだろう。Kさんの青年海外協力隊としての生き方は、子どもたちに少なからず大きな印象を与えたようである。単元の最後に書いたKさんへの手紙の内容からも分かる。

子ども自身の生活と、アフリカの子どもたち、またそこに自分が行ったとしての生活を比較すると、本当に大きな違いがある。そこに、子どもの本音が出てきた。日本にいる限り、実際に体験することが難しい生活である。そういう中で、実際目の前で出会ったKさんは、2年間も経験している。そして少なからず担任の私も11日間体験した。「どうして2年間も？」という子どもの価値観と、出会った事実との間に『ずれ』が生じた。この『ずれ』になんとか注目することができたと思う。

今すぐに協力隊に行きたいという思いにならないまでも、自分のできる国際協力に少しずつでも関心をもってほしいと思う。また、募金活動に代表される今後の具体的な活動が、対象とされる開発途上国の子どもの様子を考えながらできるものになってほしいと願っている。